



フアッシュン感 を くすぐる斬新な胴

撮影◆窪田正仁

なんともユニークな発想の新商品である。透明な胴台によって、ひとつの胴で数種類のあじらいが楽しめるのは、その名も「スケル胴」。福岡県粕屋郡を拠点とする(株)ケンプロがインターネットで販売するこの胴は、昨年の夏に世に出た。

オシヤレをした、という価値観がある以上、選んでできる土壌は必要

透明な部分の素材は、耐衝撃性樹脂。警察の盾などに使用されるポリカーボネートに匹敵する強度があるという。黒皮革のしつかりとした胴胸と組み合わせられ、透明な胴台の内側に、柄をあしらったパネルが自在に装着できるようにになっている。パネルはリバーシブルで、例えば、高級感漂う白蛇柄の胴から、シックな無地の茶胴に早変わりすることも可能。表裏変更の着脱は、慣れれば3、4分ほどでできる。

胴台は警察の盾などに使用されるポリカーボネートに匹敵する耐衝撃性樹脂を使用。打突の感覚や打突音は従来の胴と遜色ない



モニターとして使用するある剣道範士が、講習会の際、午前と午後でパネルをチェンジしたところ、二つの胴を持ってきていると思われたそうだ。つまりは、よくよく見ればプラスチック製品特有の光沢があるものの、一見しただけでは午前には本物の蛇柄に、午後には本物の漆塗りに映った、ということ。とくに柄物は単純なプリントではなく、凹凸があるPVCの生地にプリントしているため、リアルな質感を醸し出す。現在のところは既製のパネルを主に展開しているが、ゆくゆくはオリジナルな柄にも特注対応したい、とケンプロ店主・田村啓二氏(44歳)は語る。「例えばチームの選用手とかですね。地区大会で

はこの柄、全国大会に出たときはこの柄という使い方もできるかも知れません。そもそもスケル胴の販売は、若者のもつオシヤレ感を剣道の世界でも反映できれば、と思ったからです。オシヤレは自己満足に過ぎないものかも知れませんが、洋服にしても、オシヤレをしたい人としてたくない人とは、そもそもその価値観に違いがあるわけですから、オシヤレをしたいという価値観がある以上、それを満たすことができるよう、選択の対象となるような商品を提供したい、というのが出発点でした」
田村氏が手掛ける商品のひとつに防具袋や竹刀袋がある。かつて小誌でも紹介したことがあるが、既成概念にとられないスポーティーなそれらは、若い剣士のあいだで人気を博している。「一昨年のインターハイでは、ケンプロのバッグを使用する高校が13校も団体戦出場を果たしていました。嬉しかったですね」
と田村氏。新商品のスケル胴も昨年の玉竜旗大会の会場で出展したところ、目を丸くして商品を手取る人が多かったという。そんな中で世界選手権大会にも出場したアメリカチームのある選手がスケル胴を使いはじめたところ、外国選手団のあいだで大きな反響が沸いたそうだ。海外の人々にとっては、むしろ合理的な感覚として受け入れ



(株)ケンプロの店主・田村啓二さんは福岡生まれの福岡育ち。小学2年生から剣道を始め、福大大濠高校時代は玉竜旗ベスト8、国体出場、明治大学時代は全日本学生優勝大会の出場の経験ある

さまざまな柄を楽しめる透明な胴台 (株)ケンプロが販売する 画期的な「スケル胴」

Report No,



白蛇柄のパネルをはめた状態



チェンジパネルは表裏違った柄をあしらったりリバーシブル製品。伝統文様や皮革模様以外に、もちろん無地も用意されている



スケル胴のかなめとなる胴台部分。竹製の胴と同じようにへり革と結合するための穴が空けられている



チェンジパネルの付け替えは3分程度で可能。パネルはスケル胴と同じく湾曲に成型されているためピッタリ密着し、なおかつへり革の部分にしっかりとめ込む仕組みなので、動きの中でパネルが外れてしまうことはない

	スケル胴	チェンジパネル	身長目安
4号(M)	60,000円	12,000円	145cm～160cm
5号(L)	63,000円	12,600円	160cm～175cm
6号(LL)	66,000円	13,200円	175cm～190cm

◎3月号発売に合わせて、2月1日～3月31日までの期間、「スケル胴お試しキャンペーン」と称して、スケル胴、チェンジパネルともに表示価格の3割引で販売します。(ケンプロ)

ケンプロ URL <http://www.ken-pro.jp> メール info@ken-pro.jp
問い合わせ (フリーダイヤル) 0120-555-474 FAX 092-938-5402

やすい面があるのかも知れない。
一方で田村氏は、日本の伝統的な竹胴の価値を十二分に認めている。実際にケンプロでは手刺し防具や竹胴も商品として扱っており、日本の職人技に、田村氏は畏敬の念さえ持っている。
「海外で作られた胴で、竹が割れてしまったり、張ってある革が変形してしまったりした粗悪品を見たことがあります。そういう胴はとてもお客様には提供できません。竹製の胴はやはり作るのが困難なのでしょう。細い竹を一本一本組んで湾曲の胴台を作り、そこに革を張って強度を上げ、なおかつ革の上に漆を塗る。この漆がまた強く、さらには磨きに磨き込んで鏡のような艶やかな仕上がりとする——まさに芸術的でさえあります。日本の職人技にはやはり凄さを感じますね」
田村氏には、スケル胴を竹製の胴に取って代わる製品にしようというような大それた発想は、毛頭ない。日本の伝統は生かし、残しつつも、この

時代だからこそ使える素材を生かし、この時代だからこそ台頭してきた使い手のニーズに応えたい、という一念が原点にあるだけである。面白いのは、特殊なプラスチック製品ではあるものの、重量においては竹製の胴とほぼ同じに仕上がっていること。伝統的な防具が持つ装着感を失いたくないという思いがあるのだろう。実際、モニターとして使用する人の反応からも、「打突の衝撃、打突音、装着感において、まったく違和感がない」という言葉が聞かれている。
剣道ブ、プロショップ、剣道ブ、ユース、剣道ブ、デュースの意味を込めた「ケンプロ」は、今年、創業5年目を迎える。フアッションを積極的に楽しめる剣道、をテーマのひとつに掲げ、最近では、垂れネームの「3次元刺繍」なるものも、商品展開している。ユーザーを楽しませようとする柔軟な発想は、若者たちの剣道離れを食い止める力となる可能性を秘めている。